京都、２００１年8月１２日

モーリスへ、

暑い。普通は体の外の方が体の内側より涼しいはずだ、特に湿度は低いはずだ。でも、日本の夏のこの時期は違う。尿のような、暑い、湿った空気が体を太陽光のごとく包み込み、肌をなめるが感覚は無い。体の境がどこかわからない。夏は僕の肌の上に、中に、下にある。それゆえ僕の肌は「肌である」意味を少し失う。それについては言うことはそれだけ。

日本の女性は、高くて細いかかとのハイヒールで身を高くする。小さいことへのコンプレックスがその理由らしい。でも別の理由もあるようだ。細い靴は脚を守ってくれず、ひっきりなしにぶつかる。だから彼女達のほとんどは足、ふくらはぎ、脚の下部から腿のつけね、ひざの上まで、傷つき、青あざがある。彼女達の脚は丈夫で強い。「つま先立ちのようにして」いつも歩いているから。常にこすれる部分には魚の目ができる。脚は西洋美が求める制約の形を取り、歪み、はれる。それが女の足だ。僕にはある考えがうずくように徐々に浮かんでくる。高いハイヒール、そのほとんどがか細く、アキレス腱の下にぶら下がっているヒールは、日本女性の「現状」を表しているように思える。とがった先に身を置き、身を高め、彼女達は自分には無い脚をまるで作り上げなければならないと思っているかのようだ。
彼女達の土台は今にも折れそうな棒、常に転びそうだ。

この「今にも転びそうな風情」こそが、男性の興奮を呼び起こす、少なくとも呼び起こすはずのこの種の靴のねらいなのだろう。拷問のようなもの、強制されたアンバランスは同情を、そして哀れみをさえさそう。びっこにされ、かよわくされた、そのようなものを身につける女性や、時には男性は、邪悪な影のもと開始される狩の獲物だ。誰もが知るように、美しくかよわい不具者をみると、しおれさせ、中傷し、壊したくなる。そして美しくかよわい不具という定義の中に、性の生々しさが、存在の根拠や自らの姿を見いだす事も我々は知っている。地面との接触が益々希薄になり、逃げようとしているのか、それとも逃げ道を閉ざそうとしているのか、この地震の多い国で一センチ角の土台の上の高みにとどまる日本の女性は、悲惨だ。そして戦後日本、戦後から抜けきれない日本に呼応した暗喩に富んだヴィジョンを与えてくれる。
友情を込めて、

エリック・ヴァン・ホーヴ

Copyright©Eric Van Hove - all rights reserved